NTS物語

番外編2

新・天のシルクロード
～凧はいつ空を舞った？～（4）

代表取締役　吉田　隆

●カブールの空を凧は舞う

前号で「The Kite Runner」を取り上げた。ウェブサイトで見つけた本だが、意外にもアマゾン書店の米出版業界ベストセラー100選で「ダビンチ・コード」や「ハリー・ポッター」に並び第13位にランクされている。しかも、スピルバーグ監督が映画化権を取得したという情報を目にし、思わずその場で翻訳権の取得を試みたが手遅れであった。近く、日本語版が発刊されるだろう。ところでもう一遍、凧の映画を紹介したい。舞台はレバノンとイスラエルとの国境にまたがるドゥールズという小さな村で起こった事件をテーマとした「ラミアの白い凧」。一人の少女が糸の切れた白い凧を追い、危険な国境線の鉄条網を越えたために事件は起った。詳細は映画に譲るとして、アフガニスタンにせよイスラエルにせよ凧は平和の象徴であるはずなのに、なぜ日本映画でなくイスラムなのかと漠然と考えていたら、「凧がどのようにアフガニスタンの再建に貢献したか」という記事を目にした。いわく「タリバン政権の頃はイスラム的ではないとして禁止されていた。だが今はカブールの空を凧は紙ふぶきのように舞う。」やっぱり凧は平和と希望の象徴だった。平和といえば、江戸時代、遊女が太夫に凧を贈った話を思い出したがその話は後にしたい。さて、400年の空白の後、突如「紙鳶（しえん）」から「紙鳶（いかのぼり）」へ名を変えた日本の凧の謎に迫りたい。

●イカノベーション？一奴の誕生！

図１は江戸時代初期、京で子どもが凧を手にする図である。右はその凧の図である。その全形はイカかタコと呼ぶにふさわしい。一見タコに見えるが、長崎の古い文献に「1600年頃の長崎の凧は烏賊幟と称する‘イカ型の凧の類’」とあるので、当時の人はイカと見ていた。しかし、よく見るとイカではなく鳥のようでもある。ある時ひらめいた！これは、かなりデフォルメされているが、あの中国の紙の鳥‘紙鳶（シエン）’が、異国日本で千年を経た姿ではないか？　なぜもはや鳥ではなくイカというほど半円状に形が変わったのだろうか。私の想像だが、庶民が竹木や布、紙などの素材を最大限に生かし、日本の風土に合う飛翔性能を追及し、地域間で技術と情報を共有し、一つの合理的な形に行き着いた結果ではないか？その合理性への試行錯誤の中で、鳥の記憶を潔く捨て去った結果ではないか？そうなればもはや鳥である理由はなく、歴史の中でシエンはイカに駆逐されたと考えても不思議ではない。この半円状の白い無機質な凧面を見ていると、かってのリアルな鳥の記憶の影響もあり、不思議に技術革新のシンボル‘シリコンウェハ’と重なる。この形の変化はその後も続き、やがて1700年頃、流線型に落ちついた。ご存知‘奴（やっこ）’の誕生である（図２）。日本文化の特徴は、苦労して一つの形＝骨組に辿りつくと、国民的キャラクター‘奴’という一つのファッションを骨組に固定してしまったことである。ジャパニーズ・クールの面目躍如ではないか。私は日本の風土と素材とで培われた、日本の凧の千年に及ぶ鳥からイカへの一連の変化を、ひそかにイノベーションならぬ**イカノベーション**と呼ぶことにした。

●凧と携帯

日本の凧は風や素材の科学技術、若衆組などの民俗つまり社会科学的諸条件が全国レベルで最大公約数として形に集約されて誕生した国民的総合芸術である。社会の枠にはまることで生まれたという意味では総合デザインとも言える。かつて‘扇子（せんす）’等を引き合いに出し日本文化の特徴を「縮み志向」と表現した人がいた。種々の機能を小さな空間に凝縮した携帯電話もその範疇かも知れない。だが「最大公約数」を志向する日本文化の原理が先にあり「縮んだ」のはその結果という見方もできる。さて、奴の誕生にはもう一つ謎がある。私たちは奴凧を奴‘イカ’とは呼ばず、あくまで奴‘ダコ’と呼ぶ。次回は、イカとタコの謎に迫る。

【参考引用文献】
1.「凧の話」（新坂和男著、講談社、昭和56年）

「ラミアの白い凧」
（『ベネチア映画祭2003年』受賞作品）
国境警備塔の側を白い凧が、まるで鳥のように自由に羽ばたいて・・・（ブログ「シネマズー」より）

図1. 江戸時代（1600～1700年頃）の子供の凧揚げ風景。

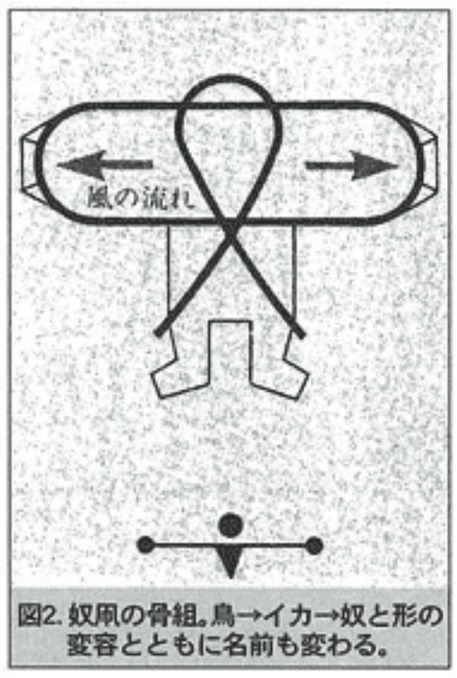

図2. 奴凧の骨組。鳥→イカ→奴と形の変容とともに名前も変わる。

◉編集後記

三寒四温、菜種梅雨、本格的春の到来までにいろいろな季節を表す言葉。会社勤めをしている私（主婦）にとっては、週末は暖かく晴れの日は家事労働が進み、おまけにショッピングも食欲も進んでしまう。さしあたり午後はハンドル片手に海沿いをドライブなんて過ごし方をしたのははるか昔の事。今では車のトランクに大きなスーパーの袋をしこたま積み込み、買出しで忙しい。「最近ガソリンが高いなあ～」なんて思いながら、ハンドルを握る。運転が億劫にならないうちに、一度燃料電池自動車を運転してみたい、思いっきり高速道路を突っ走りたい。運転大好きの私の思い。限られた資源と地球環境のためにも、秋葉先生、ファイトと心の中で思いながら、編集後記をメさせていただきます。早く暖かくな～れ。（あしだ）

◉編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-8755　東京都文京区湯島2-16-16　㈱エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係
FAX : 03-3814-9152　E-mail : k-kunimoto@nts-book.co.jp

NTSニュース
2006年3月号（通巻85号）
2006年3月7日発行